KANAGAWA

NEWS LETTER 1990. 12 No.7

〒221 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 電話(045)481-5661(代) 神奈川大学外国語研究センター

翻訳と文体 ——坪内逍遙に思うこと——

出来 成訓

筆者と関係の深いある出版社が逍遙の「沙翁全集」を刊行したのをよい機会として，かなり時間を使って読んでみた。Shakespeare には以前から讃嘆と反撥の相反する気持を持って接していたが、何しろ無学のこととて、英文で読んだのは「研究社詳注シェイクスピア双書」の20冊だけである。Shakespeare について語る資格のないことを先ず断わっておかなければならない。

「沙翁全集」は早稲田大学出版部の刊行したものの復刻であって、後に「シェークスピヤ全集」と呼ばれる新修版として完成した。

逍遙の翻訳は彼の言う「実演本位」の立場に立ってのもので、訳の見事さ以外にもすぐれた点が多く見られることは言うまでもない。それだけでなく、温厚な人柄により、論敵を含めて多くの人々から敬愛されたところなど，逍遙は Shakespeare と似た性格を持っていたと言えなくもない。馬鹿を承知で愚論を述べれば、逍遙の論敵の一人であった一代の硯学森鷗外は Ben Jonson と言うべきであろうか。こんなことを言うと、「漱石は誰かね？」という彌次がとんできそうだが、茶化すでない。これはもちろん素人の夢判断にすぎない。

全文を厳密に比較したわけではないから断定はできないが、「沙翁全集」の後期の訳は「シェークスピヤ全集」でも殆ど変化が見られないように思える。逍遙の訳文の変化はよく語られるが、訳者本人の言葉に頼りすぎ、事実を必ずしも正しく伝えていないのではあるまいか。実証的な研究が必要と思われる。

「沙翁全集」を読むとともに、逍遙の創作脚本『桐一葉』『牧の方』『沓手鳥弧城落月』『役の行者』に目を通してみた。諸家のこれまでの研究に示されているように，逍遙の創作態度には Shakespeare の影響が見られるものもある。『牧の方』などその代表的なものと思われる。問題は「ことば」つまり「表現」に Shakespeare の直接的な影響の見られぬことで，これには最初は少々びっくりした。だが、考えてみると当然のこととも考えられる。一読して他人の作品からの引用ないし借用が明白に見てとれるようではすぐれた作品とは言えないからである。Shakespeare 翻訳の最大の目的はわが国演劇の向上発展のためであっても、創作となると話は別で、「ことば」の借用など考えられぬことであったろう。創作と論文の最も大きな相違がここにある。筆者は森村商事株式会社の社内誌『もりむら』に雑文「へそ曲り放談」を連載しているが、素人なりに新聞や雑誌から借用した話題をそれと悟られぬ表現上の注意はしている。まして文豪逍遙ともなれば細心の注意を払っての創作であったろう。それにしてもこれまでは、研究者の眼がプロットにのみ向きすぎていたのではあるまいか。

翻訳・翻案の分野に於いて、われわれは、たとえば、柳田泉『明治初期の翻訳文学』、吉武好孝『明治・大正の翻訳史』及び『近代文学の中の西欧』などのすぐれた研究を持っている。『近代文学の中の西欧』には逍遙の翻案作品も採り上げられているが研究方法はやはりプロットの比較研究である。藤村や武鳥羽衣などの翻案詩だけは「ことば」が扱われているが、詩であるから当然であろう。

逍遙は『翻案について』の中で「外国物を日本化することは，自分の感想を具象するよりも、はるかにむづかしい」と述べている。原作の内容と表現の両面からの制約のきびしさを指していると考えられる。創作散文の場合は「ひとひねりした形での」表現上の影響があると考えられる。困難ではあるが、それだけに、価値ある研究対象と思われる。